石川県埋蔵文化財情報

第　42　号

巻頭図版（観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡　古宮遺跡　一針Ｃ遺跡　庄・西島遺跡、津波倉廃寺）

平成30年度下半期・令和元年度上半期の発掘調査から …… 所長　垣内光次郎 …（1）

発掘調査略報

平成30年度下半期の発掘調査

観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡（金沢市）……（4）

古宮遺跡（白山市）……（10）

一針Ｃ遺跡（小松市）……（14）

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市）……（18）

弓波遺跡（加賀市）……（22）

令和元年度上半期の発掘調査

金沢城下町遺跡（小将町１番地点）（金沢市）……（24）

山代イチマイヨリ遺跡（加賀市）……（26）

平成30年度下半期の出土品整理作業 ……（27）

令和元年度上半期の出土品整理作業 ……（30）

調査研究報告

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）出土の鳥類遺体について …… 江田真毅、山川史子 …（33）

2020年３月

公益財団法人　石川県埋蔵文化財センター

写真解説

観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡

遺跡全景（東から）

低丘陵に囲まれた谷部に観法寺ヤッタ遺跡、写真中央の丘陵斜面に観法寺ジンヤマ窯跡、ジンヤマ窯跡の丘陵上に観法寺墳墓群が立地している。

観法寺ジンヤマ窯跡　全景（南から）

丘陵斜面をトンネル状に掘り抜いて築造された直立煙道の穴窯（あながま）で、７世紀後葉～８世紀初頭に瓦と須恵器を生産していた。窯壁が残っていたほか、床面付近から大量の瓦が出土している。

遺跡全景（南西から）

観法寺ジンヤマ窯跡　全景（南から）

写真解説

古宮遺跡

調査区全景（Ｂ区４・５面）(南東から)

手取川右岸の北陸鉄道石川線加賀一の宮駅跡付近に広がる平安時代から中世（室町時代）にかけての遺跡である。1480(文明12)年まで白山本宮（白山比咩神社の前身）が所在していた地とされており、一般県道手取川自転車道線（手取キャニオンロード）改築事業に伴い発掘調査を実施した。調査区は旧線路敷部分の幅約５ｍ、延長約110ｍの細長いもので、工事との調整から、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区の３地区に分けて調査を行った。調査地中央のＢ区では、平安時代後期～室町時代後期までの最大５層の遺構面を確認した。遺構や包含層・整地層からは、素焼きの皿「カワラケ」を中心とする土師器や陶磁器など豊富な遺物が出土した。

大型礎石建物と礎石列（Ｂ区４・５面）(北西から)

Ｂ区では、平安時代後期～室町時代後期にかけての建物の礎石や礎石列、石列をもつ区画溝、飛び石の道状遺構、石畳状の敷石遺構、石段状の遺構などを火災痕跡がみられる複数の整地層を挟む遺構面で確認した。調査区の幅が狭いため施設の全体を把握できた遺構は少なかったが、これらは当時の「白山本宮」に関係した施設とみられ、文献史料から知られる火災や洪水など、自然災害のたびに繰り返された建物の再建を裏付けるものである。

調査区全景（B区４・５面）（南東から）

大型礎石建物と礎石列（B区４・５面）（北西から）

写真解説

一針Ｃ遺跡

遺跡遠景（西から）

一針C遺跡は、小松市北部の梯川中流域右岸に広がる集落遺跡で、梯川の河川改修事業にかかり、改修前堤防下の河川敷を調査した。その結果、弥生時代から中世にかけての三時期の集落跡を確認した。

下層遺構完掘状況（俯瞰）

弥生時代後期～古墳時代初頭に相当する下層面では、同一箇所で何度も建て替えられた平地建物や溝などを検出した。

遺跡遠景（西から）

下層遺構完掘状況（俯瞰）

写真解説

庄・西島遺跡、津波倉廃寺

河跡全景（Ｕ２区・南から）

河は移動を繰り返しながら南西から北東へ蛇行して流れており、複雑に切り合う流路の群となっている。最も西側で検出した奈良・平安時代の河跡は、河岸の一角を掘り広げ杭と横板で護岸を施していた。周辺からは、曲物容器や編み物等の生活道具と斎串や舟形等の祭祀具が出土していることから多目的に利用された水辺であったとみられる。

木沓出土状況（Ｕ７区）

平安時代の河跡から出土した。足背と踵（かかと）の一部を欠損するものの全体の形を知ることができる。大きさは約30×12㎝を測る。

河跡全景（U２区・南から）

木沓出土状況（U７区）

平成30年度下半期・令和元年度上半期の発掘調査から

センター所長　垣内光次郎

1　平成30年度下半期の調査

平成30年度は、石川県教育委員会から10件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省6件と多く、鉄道・運輸機構1件、県土木部3件が少ない。本号においては、下半期に発掘調査を実施した加賀の5遺跡の概要を紹介する。

観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡（金沢市）は、金沢市の北部の開析丘陵に所在する集落遺跡と古代の窯跡である。一般国道159号改築（金沢東部環状道路）に伴うもので、谷部に広がる観法寺ヤッタ遺跡と隣接する丘陵で確認された観法寺ジンヤマ窯跡の2箇所を同時に調査した。その結果、丘陵の南斜面では、7世紀後葉～8世紀初頭に瓦と須恵器を生産した瓦陶兼業の窯窯1基を確認した。窯は、排煙口、焼成部、燃焼部が残り、その構造は、床面の傾斜度が大きく、煙道が垂直に立ち上がるものであった。内部の壁際には排水溝がめぐり、その上は瓦で蓋をしていた。出土品には、重弧文軒平瓦、平瓦、丸瓦、須恵器坏、甕がみられ、市内の広坂廃寺との関連が考えられている。加えて、窯跡の前面に広がる観法寺ヤッタ遺跡では、平安時代の川跡からジンヤマ窯跡で焼成された大量の瓦が出土し、同時期の掘立柱建物も確認された。

古宮遺跡（白山市）は、白山市白山（しらやま）町に位置する白山比咩神社の旧社地に広がる遺跡である。調査は一般県道手取川自転車道線建設に伴うもので、細長い調査区からは平安時代後期から室町時代後期までの最大5面の遺構面を確認し、礎石建物、敷石遺構、石段状遺構、石列などを検出した。これらの遺構は、白山信仰でも加賀馬場の拠点であった「白山本宮」に関する施設とみられ、整地層や炭化物層は、文献史料で知られる火災や自然災害において繰り返された社殿の再建を裏付けるものと考えられた。整地層や遺構からは、大量のカワラケに加えて、白磁の椀・皿、青磁の碗や花瓶、瀬戸焼の灰釉瓶子、加賀焼や珠洲焼のすり鉢や甕などが出土した。遺物の9割以上がカワラケで占められ、白山本宮ではカワラケを用いた祭事が執り行われたことが明らかとなった。

一針C遺跡（小松市）は、梯川の中流左岸に位置する弥生時代～中世の集落遺跡で、国土交通省の梯川改修事業に伴う護岸工事と河川敷掘削に先立つ調査である。調査区は改修前の旧堤防下に位置したことから、近現代の水田耕作や土地区画事業等の影響を受けず遺跡の遺存は良好であった。そのため遺構上層の検出面は、周辺の調査地よりも30cm 程も高く、最大で3層の遺構面を確認した。各層の年代は、上層が鎌倉・室町時代、中層が奈良時代～平安時代初頭、下層が弥生時代中期～古墳時代で、各層からは建物遺構が検出されていることから、居住域として長期に利用されている。出土遺物は、上層では鎌倉・室町時代の土師器・陶器などに加えて、井戸の木製桶材が多くみられ、中層では平安時代初頭の土器・石器、下層では弥生時代中期～古墳時代前期の土器類がみられた。

庄・西島遺跡、津波倉廃寺（加賀市）は、加賀市を東西に通過する一般国道8号改築（加賀拡幅）に伴う調査で、弥生時代から近世の集落跡を確認したが、調査成果は地点ごとに違いがみられた。K2区・D区北2では、平安時代～中世の掘立柱建物や柵列、溝群などを確認し、中央部のM2区では、弥生時代後期～終末期の竪穴建物を検出し、建て替えがおこなわれたことも確認した。また、U区では奈良・平安時代の護岸施設を備えた川跡を確認し、人形、舟形、馬形などの祭祀具に加えて、皿、盤、折敷、曲物などの木製容器、木沓、農具、建築部材品とみられるものなどが多量に出土した。

弓波遺跡（加賀市）は、北陸新幹線建設事業に伴う取付道路工事に先立つ調査である。平成28年度の調査と同様に弥生時代から中世の集落跡を確認した。調査面積は440㎡と狭いながらも、全域で掘立柱建物や土坑、溝などを検出した。特にB5区では、弥生時代後期の平地式建物周溝や布掘建物の可能性がある溝を検出し、土器などに加えて、碧玉の荒割材や砥石なども出土した。

なお、平成30年度の現地説明会は、古府シマ遺跡で８月（42人）、古宮遺跡で10月（110人）、観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡で11月（120人）におこない、３遺跡で延べ272人の参加があった。

平成30年度発掘調査遺跡

№	報概遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	関係機関	関係事業
1	○	庄・西島遺跡、津波倉廃寺	加賀市庄町他	4,650	弥生～中世	国土交通省	一般国道８号改築（加賀拡幅）
2	○	観法寺ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡	金沢市観法寺町	4,720	古代～中世		一般国道159号改築（金沢東部環状道路）
3		酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	4,390	縄文～中世		一般国道159号改築（羽咋道路）
4		西面中世墓遺跡	輪島市三井町西面	1,300	近世		一般国道470号改築（輪島道路）
5	○	二宮Ｃ遺跡	小松市一針町	2,200	弥生～中世		梯川改修
6		古府シマ遺跡	小松市古府町	2,000	古代～中世		
7	○	弓波遺跡	加賀市弓波町	440	弥生～近世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
8	○	古宮遺跡	白山市白山町	1,350	古代～中世	土木部	地方改修一般県道　手取川白板摩道路
9		梅田舟ノ目遺跡	羽咋市梅田町	430	弥生～中世		地方道改築主要地方道金沢田鶴浜線（のと里山海道）
10		田岸遺跡	七尾市中島町田岸	600	縄文		国道改修　国道249号
	5件	10件		22,080			

2　令和元年度上半期の発掘調査

令和元年度は、石川県教育委員会から９件の発掘調査を受託した。関係機関ごとの調査件数は、国土交通省４件、鉄道・運輸機構２件、県土木部３件を数え。本項では、上半期に発掘調査を実施した加賀の２遺跡の概要を紹介する。

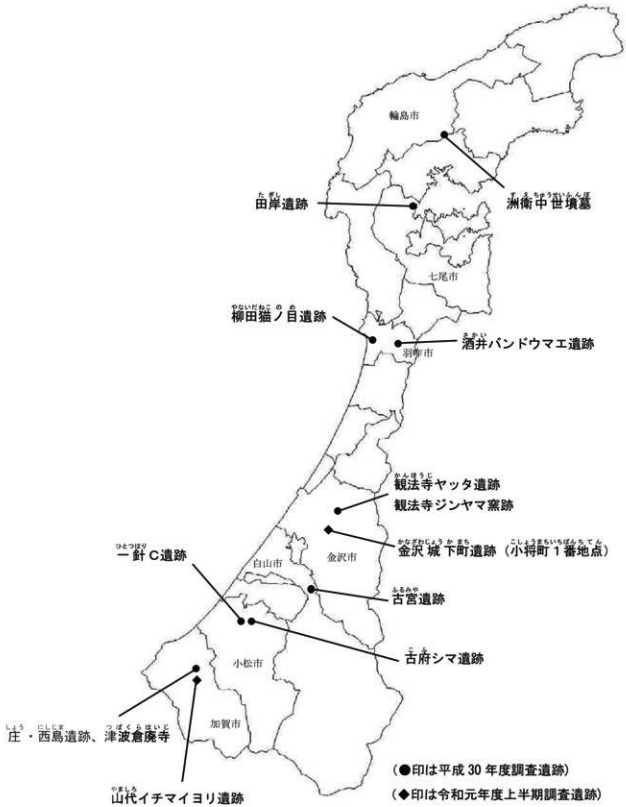
金沢城下町遺跡（小将町１番地点）（金沢市）は、新兼六駐車場整備に伴うもので、狭小ながら上下２面の近世屋敷地を検出した。上面では等間隔に並ぶ礎石列、池状の窪み、下面では木の桶を据えた土坑等を確認した。遺物は17世紀前半の陶磁器、土師器、瓦、漆器椀、箸などがみられた。

山代イチマイヨリ遺跡（加賀市）は、県土木部の街路整備工事に伴う調査である。小河川の段丘上において11世紀末～12世紀頃に営まれた掘立柱建物と、井戸、土坑、柵列等を確認した。

令和元年度発掘調査遺跡

№	報概遺跡	遺跡名	所在地	調査面積（㎡）	時代	関係機関	関係事業
1		庄・西島遺跡、津波倉廃寺	加賀市庄町他	8,580	弥生～中世	国土交通省	一般国道８号改築（加賀拡幅）
2		酒井バンドウマエ遺跡	羽咋市酒井町	1,690	古代～中世		一般国道159号改築（羽咋道路）
3		二宮Ｃ遺跡	小松市一針町	4,400	弥生～中世		梯川改修
4		古府シマ遺跡	小松市古府町	1,850	古代～中世		
5		西任田遺跡	能美市西任田町	1,460	弥生～近世	鉄道・運輸機構	北陸新幹線建設
6		弓波遺跡	加賀市弓波町	660	縄文～中世		
7		田岸遺跡	七尾市中島町田岸	2,340	縄文	土木部	国道改修　国道249号
8	○	山代イチマイヨリ遺跡	加賀市山代温泉	720	古代		都市計画道路　山代黒津線
9	○	金沢城下町遺跡（小将町１番地区）	金沢市小将町	600	近世		新兼六駐車場整備
	5件	10件		22,300			

平成30年度・令和元年度上半期　発掘調査遺跡位置図



観法寺（かんぽうじ）ヤッタ遺跡、観法寺ジンヤマ窯跡（かまあと）

所 在 地　金沢市観法寺町地内

調査面積　4,720㎡
　観法寺ヤッタ遺跡 3,420㎡
　観法寺ジンヤマ窯跡 1,300㎡（範囲確認含む）

調査期間　平成30年５月21日～平成31年１月17日

調査担当　白田義彦　熊谷葉月　舘直人　神谷英生
　　加藤江莉

調査位置図（S=1/25,000）

調査区配置図（S=1/2,500）

調査成果の要点

観法寺ヤッタ遺跡
・古墳時代から中世の集落を確認した。
・古代の掘立柱建物、溝、河跡などを検出した。
・河跡から平安時代の土師器、木製品のほか、ジンヤマ窯跡で焼成された瓦が大量に出土した。

観法寺ジンヤマ窯跡
・７世紀後葉～８世紀初頭に操業した地下式直立煙道の窖窯とその周辺状況を確認した。
・窯体内から大量の瓦や須恵器が出土した。

観法寺ヤッタ遺跡・観法寺ジンヤマ窯跡は、金沢市北東部、森本川流域の右岸丘陵裾部に立地し、今回の調査は金沢東部環状道路（国道159号）建設に伴うものである。

森本川流域の河岸段丘上や丘陵裾部には遺跡が多く、北加賀の中心的な地域だったと想定されている。両遺跡が立地する右岸域周辺には、観法寺窯跡、観法寺瓦窯跡などの窯跡が知られ、須恵器や瓦の生産域であり、観法寺ジンヤマ窯跡はその中の一角を占める７世紀後葉～８世紀初頭の窯跡である。

観法寺ヤッタ遺跡

観法寺ヤッタ遺跡は観法寺ジンヤマ窯跡の南側谷部に展開する集落で、古墳時代～中世の遺構を検出し、比較的まとまった遺構は古墳時代末、平安時代後半、中世のものである。

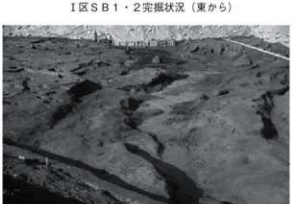
ＳＤ１は古墳時代の溝で、Ⅰ区の東から西へ流下し、幅2.0ｍ、深さ1.3ｍを測り、溝断面形はＶ字状を呈する。溝断面土層観察で、溝底の堆積物には流水の痕跡が認められ、溝覆土は、主に褐色系の粗砂、砂であり、洪水時にもたらされ、埋まったものであろう。ＳＤ２は古墳時代末の溝で、Ⅲ区で検出し、幅約40ｍ、深さ約30ｍを測り、溝断面形はＵ字状を呈し、古墳時代末の須恵器や木製品が出土した。ＳＢ１は２×４間の掘立柱建物で、木柱が残っていた柱穴もあり、丸柱で直径は20～25㎝のものが多かった。ＳＢ２は２×２間の総柱建物で、残っていた柱は角柱で、一辺20㎝前後のものが多く、ＳＢ１と建物主軸は一致する。Ⅱ区のＳＢ３は２×３間の総柱建物で、柱穴は総じて小さく、直径25㎝前後のものを主体とし、建物主軸はほぼ南北方向を指向することから、中世の建物と考えられる。ＳＤ３はⅠ区東側からⅡ区へ流下する河跡で、Ⅱ区下流部の幅は約11ｍ、深さ約1ｍを測り、観法寺ジンヤマ窯跡で焼成された瓦と平安時代後半の土器・木製品が出土した。（白田義彦）

観法寺ヤッタ遺跡平面図（Ｓ＝1/400）

Ⅰ区完掘状況（東から）

Ⅰ区ＳＢ１・２完掘状況（東から）

Ⅲ区ＳＤ２完掘状況（南東から）



Ⅱ区ＳＤ３完掘状況（南から）

Ⅰ区ＳＤ３漆器出土状況

観法寺ジンヤマ窯跡

平成14年度に丘陵斜面に削られた窯跡が発見され、窯跡より下の斜面裾と谷部で緊急確認調査が実施された。その際、前庭部、灰原など関連する遺構は消滅したと判断され、窯跡は養生の上、盛土で保護されていた。今回、それらを取り除き、窯本体とその丘陵斜面の確認調査を行った。

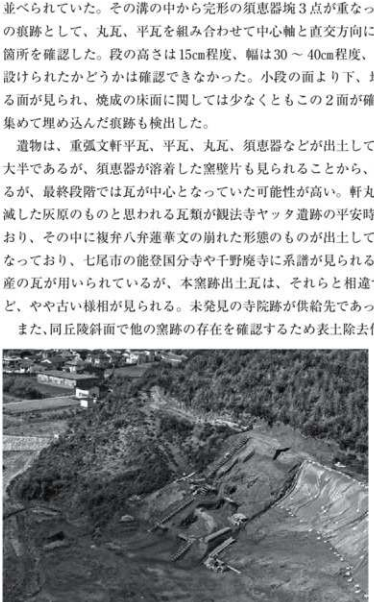
調査の結果、窯の構造は、丘陵斜面をトンネル状に掘り抜き、煙出しをまっすぐ立ち上げる地下式直立煙道の窖窯であることが判明した。排煙口、煙道、焼成部、燃焼部を確認した。排煙口から残存する燃焼部まで9.3m、煙道床面から燃焼部床面までの比高差は３m、排煙口からでは４m以上になる。煙道の背後には平坦に削られた部分があり、作業用足場と考えられる。

窯内部では、地山と同質の土を用いて天井壁、側壁が構築されていた。掘り抜かれた地山と構築された壁の間に隙間に土が流れ込んでおり、壁は窯の規模を縮小するために補修時に設けられた可能性などが考えられる。焼成部の床面では、失敗品や床の補修材として埋め込まれた大量の瓦が残っていた。床面付近の構造は、排水溝として西壁際に設けられた細い壁溝の上に、蓋のように丸瓦や平瓦が並べられていた。その溝の中から完形の須恵器埦３点が重なった状態で出土している。他に床の改修の痕跡として、丸瓦、平瓦を組み合わせて中心軸と直交方向に配し、製品を置くための小段を設けた箇所を確認した。段の高さは15cm程度、幅は30 ～ 40cm程度、２段分のみを検出した。焼成部全体に設けられたかどうかは確認できなかった。小段の面より下、地山から５～ 15cmの貼床上で黒灰が残る面が見られ、焼成の床面に関しては少なくともこの２面が確認できた。また失敗品を東壁際に寄せ集めて埋め込んだ痕跡も検出した。

遺物は、重弧文軒平瓦、平瓦、丸瓦、須恵器などが出土している。須恵器は非常に少なく、瓦類が大半であるが、須恵器が溶着した窯壁片も見られることから、須恵器も焼成した時期があるようであるが、最終段階では瓦が中心となっていた可能性が高い。軒丸瓦は窯体内から出土していないが、消滅した灰原のものと思われる瓦類が観法寺ヤッタ遺跡の平安時代以降の河跡ＳＤ３から多く出土しており、その中に複弁八弁蓮華文の崩れた形態のものが出土している。中房が蓮子ではなく、花弁様になっており、七尾市の能登国分寺や千野廃寺に系譜が見られる。金沢市広坂廃寺の創建期には観法寺産の瓦が用いられているが、本窯跡出土瓦は、それらと相違する。丸瓦が無段式（行基式）であるなど、やや古い様相が見られる。未発見の寺院跡が供給先であったと考えられる。

また、同丘陵斜面で他の窯跡の存在を確認するため表土除去作業を行ったが、痕跡は認められなかった。地滑り等で消滅したことも否定できないが、検出された焼成床面が少ないこと、遺物の種類が少なく年代差があまり見られないことから、７世紀後葉～８世紀初頭の短期間で１基のみの単独操業であったと可能性が高いと考えられる。

（熊谷葉月）



観法寺ジンヤマ窯跡遠景
（東から）

燃焼部上層床面検出状況（南から）

焼成部窯壁検出状況（北上方から）

上層床面遺物出土状況（南下方から）

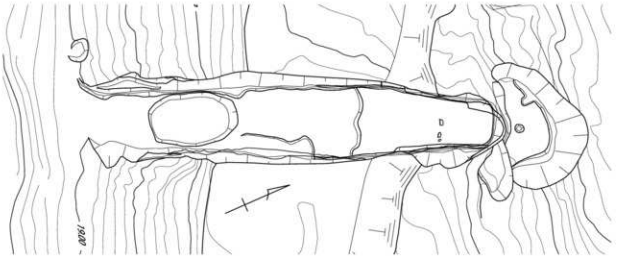
上層床面小段（南下方から）

壁溝上瓦出土状況（東から）

壁溝内須恵器出土状況

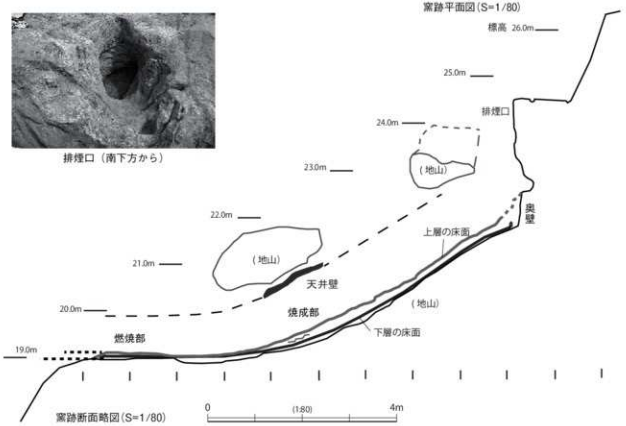
下層床面検出状況（南下方から）

奥壁付近（南下方から）



窯跡平面図（S=1/80）

排煙口（南下方から）



窯跡断面略図（S=1/80）

完掘状況（南下方から）

出土瓦・須恵器

古宮遺跡

所在地　白山市白山町地内
調査面積　1,350（平面積550㎡）

調査期間　平成30年6月27日～同年11月13日
調査担当　安中哲徳　横山純子

遺跡位置図（S＝1/25,000）

調査成果の要点

- 包含層や整地層を挟む最大5層の遺構面を確認し、平安時代～室町時代の礎石や礎石列、飛び石状の道状遺構、石畳状の敷石遺構、石段状の遺構などを検出した。
- これら遺構は当時の「白山本宮」（白山比咩神社の前身）に関係した施設とみられ、文献資料から知られる火災や水害など自然災害のたびに繰り返された社殿の再建を裏付けるものである。
- 遺構や包含層・整地層からは、細かく割られた素焼きの皿「カワラケ」を中心とする土師器や陶磁器などの遺物が出土した。

古宮遺跡と周辺の遺跡

遺跡位置図

古宮遺跡は、手取川右岸の北陸鉄道石川線加賀一の宮駅跡付近に広がる平安時代から中世（室町時代）にかけての遺跡である。現在の古宮公園一帯は、安久濤之森と呼ばれる1480（文明12）年まで白山本宮（白山比咩神社の前身）が所在していた地とされており、鶴来町（現白山市）教委による1996年の手取川七ヶ用水白山管理センター地点の発掘調査では、中世のカワラケ（素焼きの土器皿1,700枚以上）がまとまって出土した祭祀遺構が確認されたことで、注目された。

今回、一般県道手取川自転車道線（通称、手取キャニオンロード）改築事業に伴い、1,350㎡（平面積550㎡）を発掘調査した。調査区は旧線路敷部分の幅約５ｍ、延長約110ｍの細長いもので、工事との調整から、Ａ区・Ｂ区・Ｃ区の３地区に分けて調査を行った。調査では平安時代後期～室町時代後期までの最大５層の遺構面を確認した。各遺構面の時期は、第１面（室町時代～戦国期）、第２面（室町時代）、第３面･第４面（鎌倉時代～室町時代）、第５面以下（平安時代）が中心と考えられ、遺構や包含層・整地層からは素焼きの皿「カワラケ」を中心に、中国製の青磁や白磁の花瓶・碗・皿、瀬戸焼、加賀焼、珠洲焼、越前焼のすり鉢や甕、砥石などの石製品、鉄釘や銅銭など、豊富な遺物が出土した。北側のＡ区では２面の遺構面を確認し、中世後半のカワラケをまとめて廃棄したとみられる土坑がみつかった。中央から南側にかけてのＢ区・Ｃ区では、平安時代後期～室町時代後期にかけての最大５層の遺構面を確認し、建物の礎石や礎石列、石列をもつ区画溝、飛び石の道状遺構、石畳状の敷石遺構、石段状の遺構などを検出した。また、焼土や炭化物、被熱痕跡のある礎石など火災痕跡を複数の遺構や整地層・包含層で確認した。

☆文献史料にみられる白山本宮の被災内容

『続左丞抄』第一、文永六年(1269)付吉田兼文勘文

・治暦四年(1068)、加賀白山本宮の神殿ならびに御躰等が焼失し、再び造立がなされたと引用。

『三宮古記』（白山比咩神社蔵）

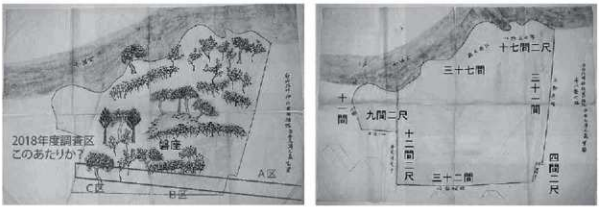
・文保元年(1317)、加賀国白山本宮が焼失。

『白山宮荘厳講中記録』（白山比咩神社蔵）

・延応元年(1239)、神主町宮保氏盛の宮倉より出火、同年新造の「白山宮神殿以下廿一宇」を焼失。
・建長四年(1252)、加賀国白山本宮の市場在家が洪水により流出。禅師宮の本殿、拝殿が焼失。
・正平六年(1351)、加賀国白山本宮の五重塔、南大門楽屋等落雷により焼失。
・延文元年(1356)、洪水により、平等寺と市場在家が流れ、「宮尻ノ道」も崩壊。
・文明十二年(1480)、今町の公人道徳の家より出火、類焼が白山本宮に及び、正殿･本殿･等･講堂･大拝殿･常行堂など社殿堂宇がことごとく炎上。
　⇒この火災により、白山本宮は現在の白山比咩神社のある三宮に仮遷座された。

調査区の幅が狭いため遺構の全体を把握することはできなかったが、今回検出した遺構は、当時の「白山本宮」に関係した施設とみられ、文献史料から知られる白山本宮の火災や洪水など、自然災害のたびに繰り返された神殿の再建などを裏付けるものである。『白山比咩神社旧社地（安久滝之森）甲図・乙図』（金剱宮蔵　明治初期）には、中央に緑の高まりが描かれており、現在、古宮公園の水戸明神裏に位置する大岩が磐座とされていることから、今回の調査区のＢ区・Ｃ区は絵図に描かれた白山本宮旧社地の一画にあたり、Ｂ区北側で検出された大きな石列は、方向からも絵図にある敷地の北辺に積まれた石積みとみられる。

出土遺物の９割以上は、細かく割られた平安時代後期～室町時代後期のカワラケで占められ、遺構や包含層・整地層から多量に出土していることから、白山本宮では長期間に渡りカワラケを用いた祭事が頻繁に行われており、敷地造成の際に、造成土にカワラケ片を混ぜていた状況がうかがえる。今後の整理作業により、今回の調査区の白山本宮敷地内での正確な位置や各面と遺構の時期比定、文献資料にみられる自然災害との比較、祭事の内容などを総合的に検討し、同様な性格を持つ他の遺跡と比較することで、白山本宮の構造や変遷をより明らかにできるものと考えている。　（安中哲徳）

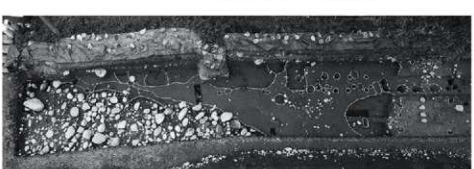


白山比咩神社旧社地（安久濤之森）乙図・甲図（金剛宮蔵　明治初期）
（「古宮遺跡」1998 鶴来町教育委員会を一部改変）

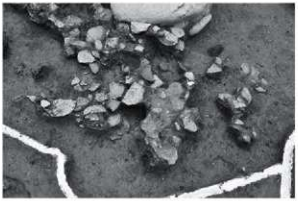
A区２面　全景（北東から）

B区３面　全景（北東から）

B区４・５面　全景（北東から）



C区３面　全景
（北東から）


まとまって出土した中世のカワラケ（A区２面）

石列を伴う区画溝（B区１面）

石段状の道状遺構（B区２・３面）

飛び石状の道状遺構（B区２面）

敷地北辺の大型石列と配石状遺構（B区３・４面）

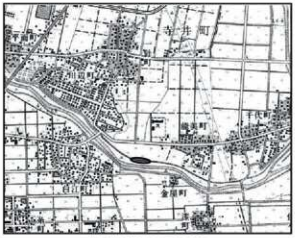
１×１間の礎石建物（B区３・４面）

大型礎石建物と石畳状の敷石遺構（B区４面）

敷石列の道状遺構（B区４面）

一針（ひとつはり）C 遺跡

所 在 地　小松市一針町地内
調査面積　2,200㎡
調査期間　平成30年10月2日～平成31年2月15日
調査担当　浜崎悟司　岩瀬由美　水田　勝
　　西山美那　中谷光里　神谷英生



調査位置図 (S=1/25,000)

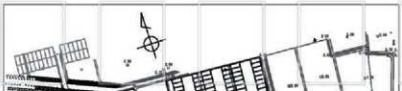
調査成果の要点

- 部分的に上中下３面の遺構を確認した。
- 弥生時代～中世にかけての遺物が出土した。
- 上層では中世の屋敷地を検出した。
- 中層では奈良時代～平安時代初頭の建物を検出した。
- 下層では弥生時代後期～古墳時代の住居跡を検出した。

一針Ｃ遺跡は小松市北部を流れる梯川中流右岸に立地する。平成25～27年度に新堤防築堤予定地の改修前堤防北側を調査しており、弥生時代～中世の複合集落が確認された。平成29年度から梯川河川改修事業に伴う護岸工事、河川敷掘削にかかる調査が始まり、改修前堤防の南側に広がる河川敷の調査を行った結果、弥生時代の環濠や、中世以降の旧梯川流路などを確認した。

平成30年度は改修前堤防の撤去工事が終了したことから、その下を対象として調査を行った。

改修前堤防下は開発の対象から外れていたため、旧来の堆積層が良好に遺存していた。これまでの調査では残っていなかった中世の包含層以下の堆積を認め、上層の遺構は隣接する過年度調査地より30㎝高位で検出された。そのため、近世以降の梯川流路が掛かる東端部と、改修前堤防の築堤工事の際に梳き取られた調査区南辺部を除いた全域に上下２面、西端部で上中下３面の遺構面を確認した。



調査区配置図

上層では，南北方向に走る溝、その方向軸に沿って立つ掘立柱建物、井戸、竪穴状遺構などを検出した。掘立柱建物は４間×６間クラスと推定される南北棟が、確認した屋敷地の主屋とみられる。井戸は大小合わせて15基検出した。そのうち３基に井戸枠が残っており、１基は舟材を転用したもの、２基は縦板組であった。縦板組の井戸は重複しており最下層には水溜の曲物も遺存していた。井戸枠が

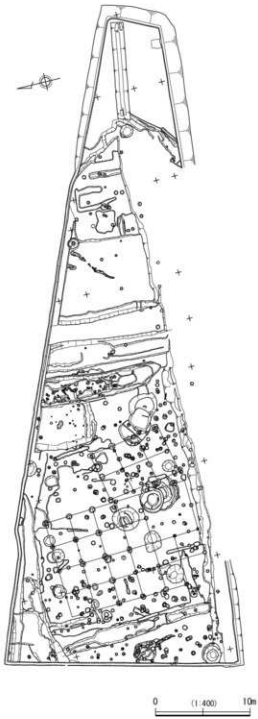
遺存していなかった井戸についても、曲物など何らかの側が存在していたと思われる。井戸には井戸祭祀を行って丁寧に埋めたものがある一方、五輪塔や石臼など不要品の廃棄場所として利用されたものもあった。時期は鎌倉時代～室町時代であり、井戸の設置数からすると連綿と集落が営まれていたことが分かる。なお、遺構の一部には砂で埋まったものが確認されたことから、集落が営まれていた時期にも梯川の氾濫の影響を受けたようである。

中層は調査区西部から下流に向かって鞍部が始まる箇所で確認した。鞍部には下層の土器を多く包含した黒褐色土層が厚く堆積しており、その上面で奈良時代～平安時代の遺構を検出した。遺構は柱穴と溝を中心とし、２間×２間の掘立柱建物を１棟確認した。この建物中心の柱穴はやや柱筋からずれているものの、総柱の倉庫とみられる。この時期の遺構は多くないが、同規模の建物が過年度の調査でも点在して検出されている。中層の遺構にも洪水砂で埋没したものが確認され、その砂層から平安時代初頭の土器が出土した。

下層遺構は調査区東端部を除いた全域に確認し、平成30年度は中層が確認された西端部を除いた上流側の調査のみを行った。下層の遺構密度は高く、柱穴や溝を多く検出し、一画では、平地建物の周溝とみられる大きな湾曲した溝を確認した。当初は巨大な建物かと想定したが、調査を進めた結果、周溝が何条も重複していることが判明した。周溝から出土した土器は、弥生時代後期前半～古墳時代初頭の長期にわたり、同一箇所で連綿と居を構えていたことが分かる。土地利用に制約があったのであろうか。周溝の内外で検出した柱穴には、柱根や礎板を遺すものもあり、概して深い（60㎝以上）こととともに、当調査区における良好な遺存性を示すものとして留意された。そうした卓越した規模の柱穴が錯綜していることにより、柱組の抽出作業はほとんどできておらず、今後に残された課題は大きい。平地建物の他には１間×２間の掘立柱建物１棟を検出した。北接する過年度調査区では墓域と居住域が混在していたとされるが本調査区では墓は確認されず、居住域であったとみられる。

（岩瀬由美）

調査区遠景（東から）



上層全体図

掘立柱建物完掘状況

井戸枠出土状況（縦板組）

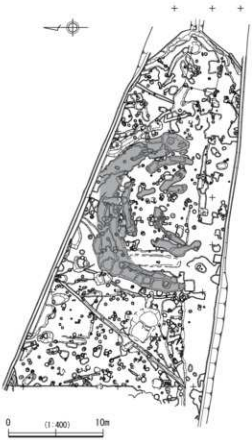
井戸枠出土状況

井戸に捨てられた五輪塔

中層全体図

掘立柱建物完掘状況（中層）

平地建物検出状況（下層）



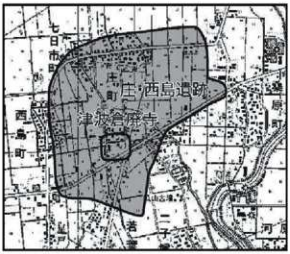
下層全体図

平地建物完掘状況（下層）

遺物出土状況（下層）

庄（しょう）・西島（にしじま）遺跡、津波倉廃寺（つぼくらはいじ）

所 在 地　加賀市津波倉町地内他　　調査期間　平成30年４月25日～同年12月10日
調査面積　4,650㎡　　調査担当　立原秀明　西田昌弘　水田勝　川名俊　横山純子



遺跡位置図（S=1/25,000）

調査成果の要点
- 北東部のＳ６区は、上層で奈良時代の掘立柱建物、下層で７世紀代の掘立柱建物を確認した。
- 中央部のＵ１・２・７区では木製祭祀具等が出土する奈良・平安時代の河跡を確認した。
- 南西部のＭ２区では弥生時代後期から末期の竪穴建物を３棟確認した。

庄・西島遺跡は江沼平野の中央部に位置する集落遺跡である。遺跡は標高10m前後に立地し、約１km東には大日山系を水源とする動橋川が流れる。本遺跡の包蔵地内には古代寺院・津波倉廃寺の推定地も含まれている。

発掘調査は国道８号の改築工事に伴うもので、平成27～29年度に続く４年目となる。当該範囲での改築は本線が現道の北側への拡幅工事となり、発掘調査区には国施工分の交差点等部分も含む。過去３ヶ年度の発掘調査により弥生時代から中世までの複合遺跡としての細部状況が知られるようになったものの、津波倉廃寺については瓦片が出土している他は明らかになっていない。

第４次となる平成30年度は、大きく北東部（Ｓ５・６区）と中央部（Ｕ１～７区）、南西部（Ｍ２区、Ｄ区北２、Ｋ２区）の３ヶ所で発掘調査を行った。

調査区位置図

北東部のＳ５・６区では、平成29年度の調査区（Ｓ１～４区）で確認された古代の遺構が密集していると予想したが、Ｓ５区では遺構の大部分がコンクリート基礎で破壊されており、北側で掘立柱建物の柱穴と溝をいくつか検出したのみであった。遺物は包含層から多量に出土したが、遺構からの出土は少なかった。Ｓ６区は昨年度調査区（Ｓ１区）の北側にあり、上層と下層２つの遺構面が確認された。上層面は奈良時代とみられる建物規模不明の柱穴を数基確認した。下層は遺構密度が高く掘立柱建物の柱穴、土坑、竪穴状遺構、溝を確認した。柱穴はほぼ同じ場所で掘り直されており、建て

替えを含め数棟分あるものとみられるが、狭小な調査区のため規模が確認できたものはない。またＳ１区につながる建物も確認できなかった。これら下層の遺構は７世紀代とみられる。

中央部のＵ区は、微高地上に位置する北東部Ｓ区や南西部Ｍ区に挟まれた低地となっており、Ｕ２区以東の大半で河跡群を検出した。これらは低地部で移動を繰り返しながら南西から北東に蛇行して流れており、複雑に切り合う流路の群となっている。Ｕ２区では左岸の一角に横板と杭で護岸を施し、その外側を浅く掘り広げた遺構（巻頭図版４）を検出した。周辺からは斎串、舟形、曲物容器、編み物（編みカゴか）が出土している。Ｕ７区の河跡上位層では９世紀後半頃の土師器埦が50個ほどまとまって廃棄された状況がみられ、下位層では、斎串、人形、馬形などの祭祀具の他に木香（巻頭図版４）、曲物容器、盤、折敷、箸、火きり臼、櫂、田下駄、独楽、建築部材などの多種多様な木製品が出土しており、この水辺は祭祀を含む多目的に利用されたものと考えられる。

南西部のＭ２区では弥生時代後期から終末期の方形竪穴建物を３棟検出した。いずれも切り合っており、位置や方向を変えながら繰り返し建て替えられたことがわかる。隣接する調査区（平成28年度調査）でも３棟の竪穴建物（方形１棟、円形２棟）が確認され、いずれも短期間に建て替えが行われたことが分かっており、Ｍ２区の竪穴建物も同様の性格を有するものであろう。

同じく南西部のＤ区北２とバイパスを挟んで南に位置するＫ２区は、いずれも遺構・遺物は希薄であった。

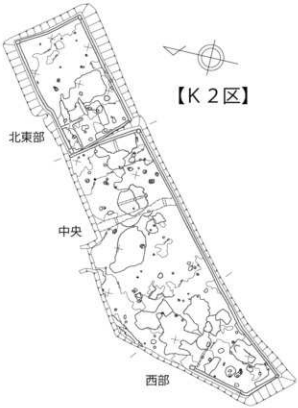
（立原秀明、川名　俊）

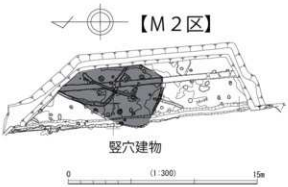
調査地遠景（小松方向から福井方向へ）

作業風景（Ｋ２区）

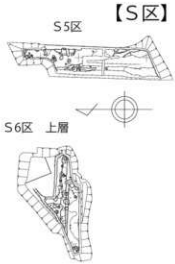
木製品出土状況（Ｕ１区）

土師器埦出土状況（Ｕ７区）





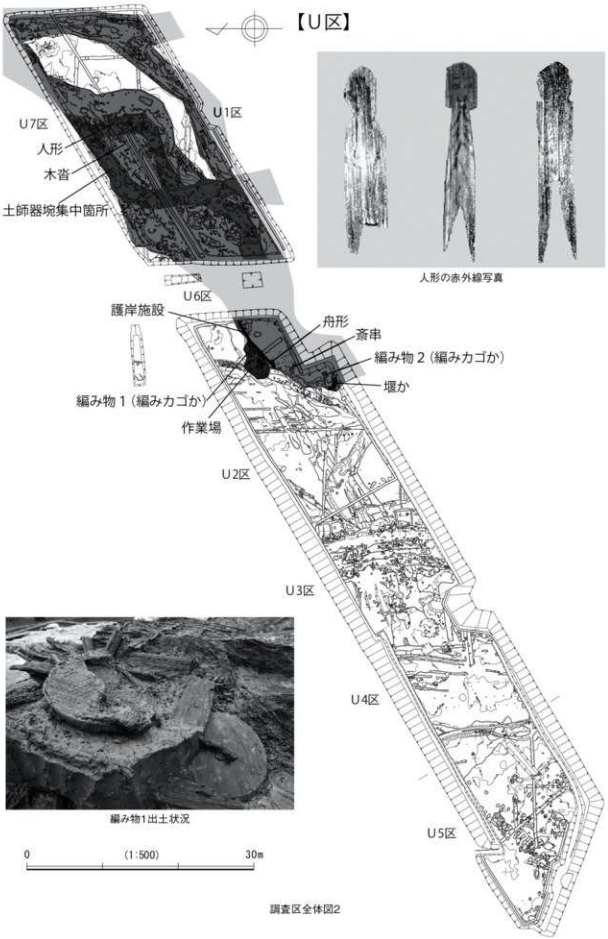
M2区　竪穴建物



M2区とS6区下層以外

S6区下層　完掘状況

調査区全体図1



人形の赤外線写真

編み物1出土状況

調査区全体図2

弓波遺跡

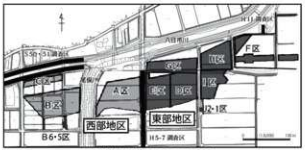
所在地　加賀市弓波町地内
調査面積　440㎡
調査期間　平成30年11月19日～平成31年1月23日
調査担当　安中哲徳　川名　俊　横山純子

遺跡位置図(S=1/25,000)

調査成果の要点

・弥生時代後期～古墳時代前期、古墳時代後期～奈良・平安時代、中世の集落を確認した。
・弥生時代後期～古墳時代前期の平地建物周溝や、布掘溝を持つ掘立柱建物、土坑、井戸などを確認し、碧玉製管玉などの石製品製作地点を検出した。
・古墳時代後期～室町時代の掘立柱建物や土坑、溝などの遺構を確認した。

調査地の遠景（北西から）



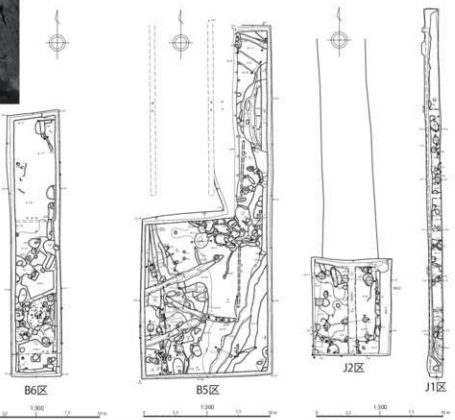
調査地位置図（S 1/8,000）

遺跡は加賀市北部の江沼盆地中央付近に位置し、西から北東に柴山潟を介し日本海へと流れる八日市川と尾俣川の合流部周辺に広がっている。過去には昭和50・51年度の河川改修事業、平成５～７・11年度に農業関連事業、平成28年度に北陸新幹線建設に伴う発掘調査が行われており、弥生時代から室町時代の集落や弥生時代の方形周溝墓や古墳などが確認されている。

今回の発掘調査は北陸新幹線建設に伴う取付道路工事等によるもので、平成28年度調査区の南側隣接部分を実施した。調査区は小規模であったが、Ｂ５・６区では、弥生時代後期～古墳時代前期の平地建物を囲む溝や布掘溝を持つ掘立柱建物、土坑、溝、古墳時代後期～室町時代の掘立柱建物や土坑、溝などの遺構を確認した。Ｊ１・２区では、弥生時代後期の井戸状の土坑や弥生時代～古墳時代の遺物包含層、古墳時代後期～平安時代の掘立柱建物、溝などを確認した。

遺物は弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器を中心に、奈良・平安時代～中世の土師器、須恵器や珠洲焼、越前焼などの陶磁器に加え、Ｊ区の包含層や遺構から玉作りに関連する碧玉製品の製作途中の荒割材などが出土した。これにより、弓波遺跡内の西側だけでなく、広範囲で石製品の製作が行われていた可能性が高まった。また、直弧文という古墳時代の石室や石棺、鏡、刀装具、埴輪などに用いられた、直線と弧線を組み合わせた特殊な幾何学文様が描かれた土器小片が出土した。呪術的意味を持つと考えられているが性格はわかっておらず、現時点で土器の全形も不明である。　（安中哲徳）

直弧文が描かれた土器
（Ｂ５区 南西から）



遺構配置図（Ｓ＝1/300）

Ｂ５区の全景（南から）

Ｊ１区の全景（南から）

布掘溝を持つ掘立柱建物（Ｂ５区 南西から）

Ｊ２区の全景と掘立柱建物（北から）

金沢城下町遺跡（小将町１番地点）

所 在 地　金沢市小将町地内
調査面積　600㎡（300㎡×２面）
調査期間　平成31年４月11日～令和元年６月20日
調査担当　熊谷葉月　山内花緒

調査成果の要点
- 金沢城・兼六園周辺で近世初期の屋敷地を確認した。
- 建物か塀の礎石、敷地区画の石列、桶の据えられた土坑などを検出した。
- 近世初期（17世紀前半）に属する陶磁器、土師器、漆器などが出土した。

調査位置図（S=1/25,000）

調査区全景（東から）（正面奥が兼六園）

石列１（北東から）

調査は、石川県兼六駐車場の建て替え工事に伴うものである。調査地西側の高台に特別名勝兼六園、南側には江戸初期に造られた県名勝西田家庭園が所在し、東側に金沢市立小将町中学校が隣接する。近世の絵図では、「侍屋敷」、「御用地」、「御花屋敷」、「新堂形」などと記載されており、侍屋敷であった後、加賀藩の管轄地になったようである。大正以降は、北陸鉄道本社、路面電車車庫、廃線後は北鉄バス車庫となっていた。昭和48年に石川県兼六駐車場が開業し、平成27年まで立体駐車場の建物（旧館）があった地点である。

調査区は、駐車場南端の築地塀に接し幅４ｍである。地表下1.2ｍまで掘り下げたところ、近代の整地面を検出し、さらにその下、約50㎝と約80㎝で２面の整地面を確認した。安全のため三段掘りにし、それぞれ1.4m、0.5m幅で掘り下げた。

調査の結果、川原石を並べて区画を示す石列や、建物礎石、池状の落ち込みなど３時期の遺構を確認した。その中で最も新しい段階①では、石列１、建物（あるいは塀）の礎石列（東西を向き３基の礎石が約4.5ｍ間隔で並ぶ）、次の段階②では、石列２と深さ0.3ｍの浅い落ち込み状遺構、石列３を検出した。石列２は調査区中央付近で、15㎝程度の川原石を２段に積み、西側が約30cm下がる段となる。落ち込み状遺構には腐食土が堆積しており、漆器や箸状木製品のほか、焦げた箇所のある長さ１ｍ以上の木材片が重なって出土した。埋め立て時に廃棄された可能性がある。段階①②は上面で検出された。下面検出の段階③では、区画となる石列４、礎石状の川原石、桶が据

えられた土坑などを検出した。そのほか、黒色腐食土の詰まった土坑は植栽痕跡の可能性が考えられる。西側の土坑には樹木根が残っていた。

主な遺物は17世紀前半の陶磁器、土師器、瓦、漆器椀、箸などが出土している。各段階での時期差は明確には認められなかった。

今回の調査では、限られた狭い幅の調査区であったが、江戸時代前期に少なくとも３回の造成が行われ、礎石建物や川原石を用いた区画を設け、屋敷地として利用されていた状況が明らかとなった。　（熊谷葉月）

建物礎石列（西から）

石列４（北から）

桶出土状況（北東から）

上面の遺構（上が西）

下面の遺構

（破線枠内）

※○数字は①～③の段階を示す

山代（やましろ）イチマイヨリ遺跡

所 在 地　加賀市山代温泉地内　　調査期間　令和元年７月８日～同年９月４日
調査面積　720㎡　　調査担当　熊谷葉月　奥座普

調査位置図（S=1/25,000）

調査区全景（東から）

加賀市山代温泉の北東、八日市川の支流である尾俣川左岸に位置する新発見の遺跡である。都市計画道路山代粟津線街路整備工事に伴い調査を実施した。調査区は南側を１区（400㎡）、北側を２区（320㎡）とした。

調査の結果、平安時代後期の集落を確認した。調査区中央で掘立柱建物１棟、井戸１基、東側で土坑１基、西側で小穴等を検出した。掘立柱建物は、南北方向を主軸とする梁行４間・桁行４間以上の比較的大きな総柱建物で、１・２区にまたがっている。柱穴からは11世紀末～12世紀代の柱状高台を持つ土師器坏が出土している。建物の西側で検出された井戸は、長軸1.2ｍ短軸0.9ｍの楕円形を呈し、深さ0.8m、検出面である地山の粘質土より下の砂礫層に達しており、常に湧水していた。

古代の土師器のほかには、遺構外から加賀焼の甕口縁１点が出土している。

調査地周辺では、西方0.5㎞に所在する山代再興九谷窯跡のほかは発掘調査例が少なく、今回、平安時代後期の集落の存在が明らかになったことは大きな成果といえる。

（熊谷葉月）

１区　掘立柱建物南半（東から）

２区　井戸と掘立柱建物（南から）

平成30年度下半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

下半期は、八日市地方遺跡（小松市　平成27～平成29年度調査）、柳田猫ノ目遺跡（羽咋市　平成29年度調査）、金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）（金沢市　平成29年度調査）の整理を行った。

八日市地方遺跡は、上半期からの継続で木製品のトレース、木製品の分類作業、C-2区出土土器の記名・分類・接合を行った。木製品の分類は２次分類としてより詳細な分類を行った。C-2区は主流となる弥生時代では、甕、壺、高坏、鉢等のほかに、壺型、鉢型、高坏型、円盤状、分銅型、土錘などの土製品が多くあり、バラエティーに富んでいる。また、炉壁、鋳型、坩堝、羽口等の製鉄関連の遺物、縄文時代の浅鉢、深鉢、中世の陶磁器類も見られた。

柳田猫ノ目遺跡では、土器の記名・分類・接合と実測・トレース、木製品の分類作業を行った。土器では弥生土器、土師器、須恵器、珠洲焼、陶磁器があり、特に墨書の接合には時間をかけた。この遺跡は寺家遺跡に隣接しており、今回当遺跡の土器と報告済みの寺家遺跡太田地区の墨書土器が接合している。

金沢城下町遺跡（本多氏屋敷跡地区）は本多家の上屋敷跡であり、近世・近代の陶磁器類・石製品の記名・分類・接合、実測・トレースを行った。（横山そのみ）

土器の実測作業（柳田猫ノ目遺跡）

寺家遺跡太田地区の墨書土器と接合！（柳田猫ノ目遺跡）

木製品の分類作業（柳田猫ノ目遺跡）

記名・分類・接合作業（金沢城下町遺跡(本多氏屋敷跡地区)）

県関係調査グループ

下半期は、梶井衛生センター遺跡（加賀市　平成28年度調査）、金沢城跡（金沢市　平成29年度調査）、弓波コマダラヒモン遺跡（加賀市　平成28年度調査）、八日市遺跡（加賀市　平成29年度調査）の出土品整理作業を行った。

梶井衛生センター遺跡は、上半期より引き続き、土器の記名・分類・接合作業と金属器の実測・トレースを行った。川跡から大型壺が複数個体出土しており、その破片はどれも似ていたことから区別して接合するのが非常に難しかった。

金沢城跡は、瓦の記名・分類、土器の記名・分類・接合、実測・トレースを行った。大型石製品は礎石、敷石等一人で持てない程の大きさの物も実測した。

弓波コマダラヒモン遺跡は、土器の記名・分類・接合作業を行った。須恵器が多く出土しており瓶類等の接合を行った。

八日市遺跡は、木製品の選別・データ整理を行った。パソコンを使用してのデータ入力が主な作業だった。（小島紀子）

鉄滓の実測作業（梶井衛生センター遺跡）

大型石製品（溝部材）実測作業（金沢城跡）

土器の記名・分類・接合作業（弓波コマダラヒモン遺跡）

データ入力作業（八日市地方遺跡）

特定事業調査グループ

下半期は、松梨遺跡（小松市　平成28年度調査、平成29年度調査）、漆町遺跡（小松市　平成27年度調査）の整理作業を行った。

松梨遺跡は、上半期に引き続き接合作業を行った。人面墨書土器の破片を探したが、なかなか見つからず、残念ながら人面になるまでにはならなかった。

漆町遺跡は、分類・接合、出土品実測作業を行った。土器・石器もあったが、鋳造関係の遺物が多く、初めて見るものばかりだった。想像もつかない遺物ばかりで、常に調査員に聞きながらの作業になった。鋳造遺物の接合作業では、土器のように形の想像がつかず手間取った。実測作業でも、傾きなどを聞かないと実測できないものがほとんどで、調査員への質問ばかりだった。調査員がいないと作業が進まない状況だった。

五十川伸矢先生に出土品整理指導にお越しいただき、漆町遺跡で出土した遺物についての話を伺ったり、海外の鋳造遺物のお話も聞くことができ、大変参考となった。（土生久美子）

土器の接合作業（松梨遺跡）

湯だめの接合作業（漆町遺跡）

鋳型付着土の除去作業（漆町遺跡）

五十川先生による出土品整理指導（漆町遺跡）

令和元年度上半期の出土品整理作業

国関係調査グループ

今年度上半期は、八日市地方遺跡のA区、D区、C-1区の記名・分類・接合、金属器の実測・トレース作業を行った。

A区では方形周溝墓、井戸、区画溝などが検出されており、方形周溝墓からは弥生時代の甕、壺等が出土している。室町時代の遺構があるため、陶磁器類なども多くあった。

D区でも方形周溝墓に伴う甕や壺等が出土しており、A区ほどではないが陶磁器類も多くあった。

A区、D区共に箱数は少ないが、方形周溝墓に伴う土器は完形に近い接合ができるものもあった。

C-1区ではA・D区とは異なり弥生土器が主流である。甕、壺、高坏、鉢、土錘などのほか、分銅型土製品や有孔円盤状土製品、絵画土器もありバラエティーに富んでいる。また、報告済みの八日市地方遺跡（1997年度調査）の土器とも接合しており、この遺跡全体としての接合を考えていく必要があると思った。坩堝、炉壁、鉄滓などの製鉄関連の遺物や、縄文土器、陶磁器類も出土している。

金属器は銅銭、キセル等のほか、ヤリガンナ、鋳造鉄斧を実測・トレースしている。

（横山そのみ）

土器の選別作業（八日市地方遺跡）

石器の記名作業（八日市地方遺跡）

弥生土器の接合作業（八日市地方遺跡）

弥生土器の接合作業（八日市地方遺跡）

県関係調査グループ

上半期は、園町遺跡（小松市　平成29年度調査）、柳田猫ノ目遺跡他3遺跡（羽咋市　平成27・28・29・30年度調査）、梶井衛生センター遺跡（加賀市　平成28年度調査）の出土品整理作業を行った。

園町遺跡は土器の記名・分類・接合作業を行った。形の似た甕や壺が多く出土しており区別して接合するのに苦労したが、ほぼ完形になった時は達成感があった。同一土器の破片が複数の遺構から出土しており、探し回る作業が多かった。土師皿や土製加工円盤も多く出土していた。

柳田猫ノ目遺跡他３遺跡は、土器は須恵器の瓶や墨書の坏、越前焼の大甕・鉢、石製品は砥石や板石等の実測・トレース作業を行った。

梶井衛生センター遺跡は大型木製品の実測・トレース作業を行った。杭・槽・網枠・3m以上の柱等があり、加工痕の残りが良く描きごたえもあった。（小島紀子）

土器の記名・分類・接合作業（園町遺跡）

土器の接合作業（園町城跡）

土器の実測作業（柳田猫ノ目他３遺跡）

木製品の実測作業（梶井衛生センター遺跡）

特定事業調査グループ

上半期は、弓波遺跡（加賀市　平成28年度調査）、漆町遺跡（小松市　平成27年度調査）の整理作業を行った。

弓波遺跡では、東部地区と西部地区の土器の記名・分類・接合作業を行った。東部地区は昨年に引き続きの接合作業で、前回の大甕より破片が小さく接合作業は難航したが、最終的に大方の破片を接合し、高さ１ｍあまりの大甕に復元できた。他にもほぼ完形になるものもいくつかあった。西部地区の接合作業は調整の遺存が悪く難航した。

漆町遺跡は、昨年に引き続き記名・分類・接合・実測作業を行った。陶磁器には、地元の焼物が多く、未成品と思われるものも出土していた。鋳造遺物では、破片が予想以上に接合したため驚いた。接合・実測作業は下半期に続く。

（土生久美子）

須恵器大甕接合作業（弓波遺跡）

須恵器大甕接合作業（弓波遺跡）

須恵器大甕実測作業（弓波遺跡）

須恵器大甕復元状況（弓波遺跡）

墨書土器（漆町遺跡）

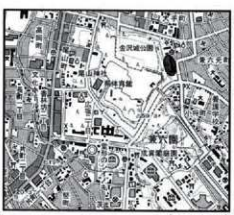
金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）出土の鳥類遺体について

江田真毅（北海道大学総合博物館）・山川史子（石川県埋蔵文化財センター駐在）

はじめに

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）は、金沢城跡の北東側を区画する白鳥堀に面した金沢城下町の遺跡である。金沢地方裁判所などの建て替えに伴う調査のため、調査区は金沢市丸の内７番地の、裁判所庁舎敷地内である。寛永８（1631）年の大火以前には、調査区周辺に町人地が広がり、区画溝や道路、導水施設などが確認された。寛永８年以降は町屋と武家屋敷が存在し、武家屋敷の庭園に作られた池が「心字池」へと拡大し、城の石垣を転用した景石や滝、石積み護岸などが整備される。寛永12（1635）年の大火以後は武家屋敷地や加賀藩の公事場へと変化した。

調査区の多くは屋敷地の庭園にあたり、苑地遺構、水溜状遺構からの出土品が多く、江戸時代前期に利用された動物遺体が池状遺構やその周辺の土坑から出土した。貝類はイワガキを含むイタボガキ科、コタマガイ、アカニシ、サザエ、ヤマトシジミなどの食用の他、イシガイ類（ドブガイ）、イトマキボラ科、魚類にはマダイが見られた。同定した畑山智史によると、マダイはカットマークなどの観察から、「カブト割り」で調理したことがわかる。哺乳類ではニホンジカ、テン、ツキノワグマ？、イヌが出土した。イヌは2015年刊行の報告書で古環境研究所により同定、報告されている。イヌ以外の哺乳類と鳥類は山川が同定などを担当したが、３点出土した鳥類については十分な現生標本との比較ができていなかったため、小論ではその再検討をおこなった。



遺跡位置図　(S=1/25,000)

資料と方法

金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）で出土した鳥類遺体は３点である。2014年発行の発掘調査報告書・第２分冊（555頁）でNo.2-3としたものが今回の作業番号１、No.2-9が２、No.2-11が３である。資料はすべて発掘調査中に視認され、ピックアップ採取されたものである。資料は現生骨標本との肉眼比較で同定した。現生標本として、北海道大学総合博物館の収蔵資料（HOUMVC）および江田（EP）の所蔵標本を利用した。骨の部位の名称はBaumel et al（1993）および日本獣医解剖学会（1998）に、分類群名は基本的に日本鳥学会（2012）に従い、同書で言及されていないカモ科の亜科や族の分類はAmerican Ornithologist' Union（1998）に従った。各資料について骨の表面の粗さと骨端の癒合状態に基づく成長段階、骨髄骨様の交織骨の有無、解体痕と加工痕の記載を試みた。

結　果

分析対象とした３点中２点で目以下を単位とした同定ができた（表）。確認された分類群はガン族とトキ科である。１は2014年の報告ではカモ科としたが、再検討の結果、ガン族の可能性を残すものの同定不能と結論した。２と３は2014年の報告でそれぞれカモ科と種不明としていたが、今回の再検討ではそれぞれトキ科、ガン族と同定できた。トキ科と同定した２は標本のトキ（HOUMVC-30076）とほぼ同大の左上腕骨であった（第２図）。一方、ガン族と同定した３は現生標本のマガン（EP-25）とほぼ同大の右上腕骨であった。いずれの資料も骨幹の平滑な成鳥のものであり、骨髄骨は含まれていなかった。また、解体痕や加工痕は認められなかった。

考　察

本稿では、金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）出土の鳥類遺体を再検討した。その結果、資料中にガン族とトキ科が含まれることが明らかになった。ガン族の資料は、比較標本として利用したマガンのほか、その大きさからハクガンやサカツラガンのものである可能性が考えられる。ガン族の骨は江戸の加賀藩藩邸であった本郷遺跡を含む江戸時代の遺跡から頻繁に出土している（新美2008、江田2017）。当時の金沢においても同様に利用されていたことが窺える。

トキ科の資料は、栄養孔の位置や尾側面の筋線の発達状況も比較したトキの標本と極めてよく一致していた。さらに日本に生息する他のトキ科の上腕骨はより細く短いことから、出土資料はトキのものの可能性が高い。トキは江戸時代の初期には北海道、東北、関東および北陸地方などに分布しており、その後幕府や諸藩が禁猟区を設け、積極的に移入し繁殖させたことにより近畿、中国、四国、九州にも生息地が広がったことが知られている（樋口ら1996）。これまでのところ本郷遺跡からはトキ科の骨は報告されておらず、また江戸時代の遺跡を見渡してもトキ科の骨の出土は稀である（新美2008）。管見の限り、トキ科の骨の出土は水野原遺跡（阿部・江田2008）や千代田区一丁目遺跡（山根2015）、四谷一丁目遺跡（江田・許2020）などに限られる。元禄10（1697）年に人見必大によって編纂された『本朝食鑑』によれば、トキの肉は煮ると脂肪が紅玉のように浮かぶため食べるものは少なく、鎌倉時代に書かれた『古今著聞集』にはトキの羽を矢羽に用いた話があることが記されている。食用だけでなく羽の利用があった可能性も指摘できる。

石川県の遺跡から出土した鳥の骨は例数も少なく、江戸時代あるいはそれ以前の時代における鳥類の利用については不明な点が多い。本稿で扱った金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）出土の鳥骨は３点と少数ではあるものの、石川県下で初めて確認されたトキ科の骨など、貴重な資料であると言えるだろう。

参考・引用文献

阿部常樹・江田真毅　2008「水野原遺跡２次調査出土の動物遺体」テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部『東京都水野原遺跡Ⅱ－連携複合施設（仮称）新築工事に伴う埋蔵文化財調査報告－』 学校法人東京女子医科大学・学校法人早稲田大学・テイケイトレード株式会社埋蔵文化財事業部　187-207頁

江田真毅　2017「加賀藩前田家本郷邸内における鳥類利用の時間的・空間的変遷―溶姫御殿に着目して―」『江戸藩邸と国元・金沢の近世食文化―動物考古学の研究成果から―』 東京大学埋蔵文化財調査室編、東京大学埋蔵文化財調査室・加賀藩食文化史研究会　45-52頁

江田真毅・許閏軒　2020「四谷一丁目遺跡（６次調査）出土の鳥類遺体」『四谷一丁目遺跡（第３分冊）』東京都埋蔵文化財センター編　116-124頁

（公財）石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会　2014 『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）Ⅰ』
（公財）石川県埋蔵文化財センター・石川県教育委員会　2015 『金沢市 金沢城下町遺跡（丸の内７番地点）Ⅱ』
人見必大（訳注：島田勇雄）1977 『本朝食鑑２』 平凡社（ワイド版東洋文庫）
新美倫子　2008 「鳥と日本人」西本豊弘編『人と動物の日本史Ⅰ　動物の考古学』 吉川弘文館　226-252頁
日本獣医解剖学会　1998 『家禽解剖学用語』 日本中央競馬会
日本鳥学会2012『日本鳥類目録改訂 第7版』日本鳥学会
樋口広芳・森岡弘之・山岸哲編1996『日本動物大百科　3鳥類Ⅰ』平凡社
山根洋子　2015 「有楽町一丁目遺跡出土の鳥類・哺乳類遺体」 株式会社武蔵文化財研究所編 『東京都千代田区 有楽町一丁目遺跡』 三井不動産株式会社・株式会社武蔵文化財研究所　379-381頁
American Ornithologist' Union. 1998. The AOU Check-list of North American Birds, 7th Edition, American Ornithologist' Union, Washington, D.C.
Baumel, J.J., King, A.S., Breazile, J.E., Evans, H.E., Berge, J.C.V. 1993. Handbook of Avian Anatomy: Nomina Anatomica Avium, Nuttall Ornithological Club, Cambridge.

第１図　出土した鳥類

第２図　トキ科現生標本との比較

番号	報告書番号	小分類	部位	左右	部分	調査区	面	遺構
1	2-3	同定不能	上腕骨	右	骨体部破片	5区南07・ウ、エ	1面	SX146-a 上層
2	2-9	トキ科	上腕骨	左	骨体部	3区北 J5・イ	3面	SG115-a
3	2-11	ガン族	上腕骨	右	骨体部破片	6区西（北）H5・イ	4面	遺構検出

表　金沢城下町遺跡（丸の内７番地点地区）出土の鳥類

石川県埋蔵文化財情報
第42号

発行日　2020（令和２）年３月27日

発行　公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336　石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477　FAX 076-229-3731
URL　http://www.ishikawa-maibun.jp
E-mail address　daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印　刷　㈱ハクイ印刷

©（公財）石川県埋蔵文化財センター